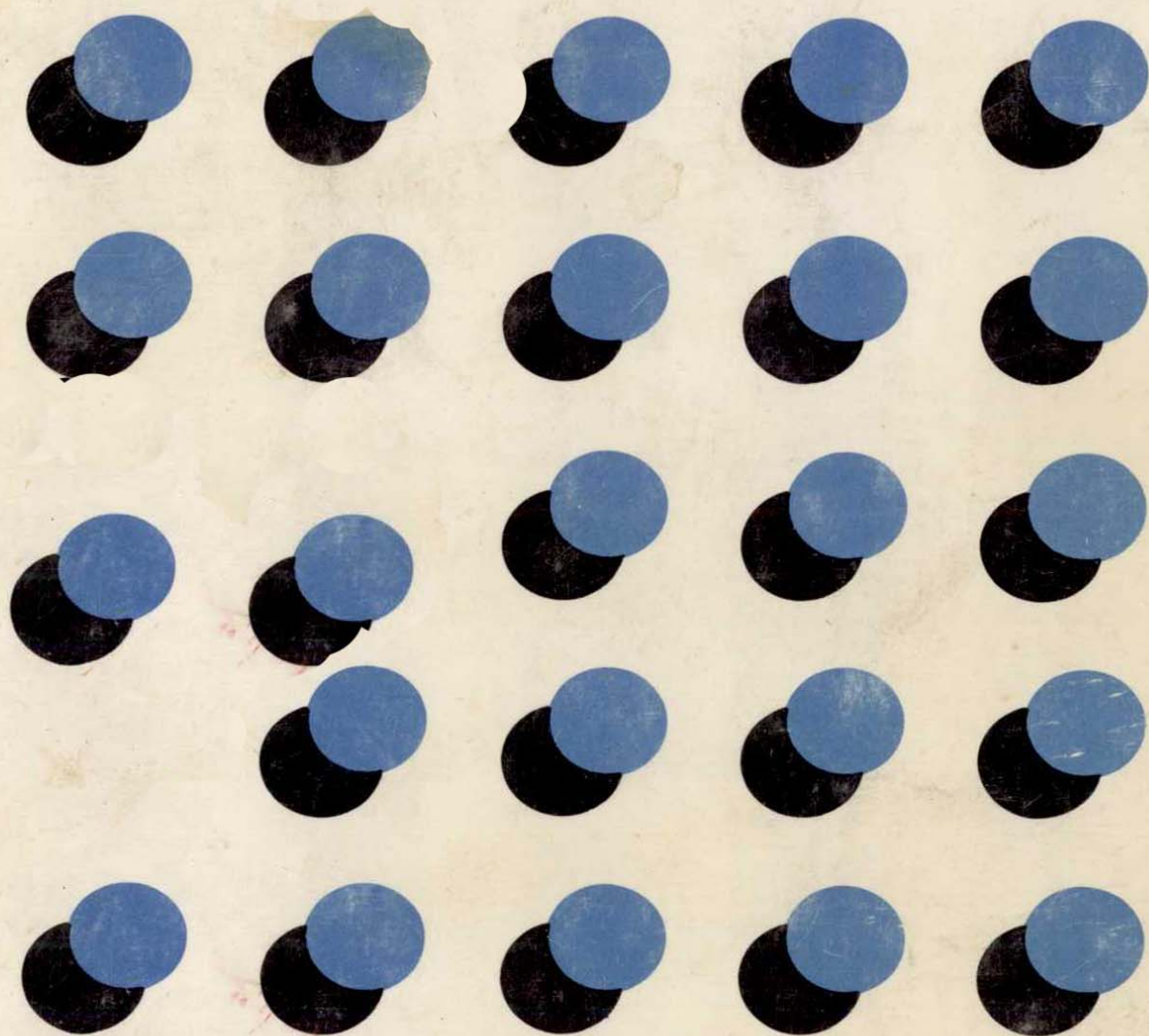


経済学と弁証法

平野喜一郎 著



大月書店

ひらの きいちろう
平野喜一郎

1938年 兵庫県に生まれる

1967年 大阪市立大学大学院博士課程終了

現 在 日本福祉大学経済学部で経済原論担当

現住所 名古屋市昭和区滝川町122

著 書 『マルクス主義経済学の擁護』（共著・新日本出版社）

『ヘーゲル論理学入門』（共著・有斐閣）

経済学と弁証法

1978年12月8日第1刷発行

¥1600

著 者◎ 平野 喜一郎

発行者 平 智 享

発行所 株式会社 大 月 書 店

印刷 三晃印刷
製本 関山製本

〒113 東京都文京区本郷2-11-9 電話 (813) 4651 振替 東京3-16387

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

経済学と弁証法

平野喜一郎 著

大月書店

凡 例

- 一、『資本論』からの引用は大月書店普及版によっており、『資本論』①、二二ページ）と略記した。①は分冊番号を示す。
- 一、『レーニン『哲学ノート』』は大月書店版『レーニン全集』第三八巻によっており、『哲学ノート』二〇三ページ）と略記した。
- レーニンは『哲学ノート』で、強調のために下線や波線など種々の記号を用いているが、本書ではこれらはすべて省略した。なお、国民文庫版『哲学ノート』は、『全集』版と同じページだてなのであわせて利用されたい。
- 一、ヘーゲルの著作については、『大論理学』とあるのは邦訳『ヘーゲル全集』（岩波書店）、『小論理学』とあるのは岩波文庫版である。なお『哲学ノート』に引用されたヘーゲルの叙述は《 》で区別した。
- 引用にあたり、傍点は省略した。
- 一、『資本論』以外のマルクス、エンゲルスの著作、『哲学ノート』以外のレーニンの著作からの引用は、大月書店版の『マルクス・エンゲルス全集』、『レーニン全集』による。なお、訳文は、『マルクス経済学レキシコン』を参考にしたところもある。

目次

序章 経済学にとって哲学とは何か

1	経済学の創造的發展とは何か	10
1	『資本論』は過去にも未来にも聞かれた体系である	10

学問としてのマルクスの理論『資本論』は科学と民主主義との最高の成果である トマス・ホッブズの自然権『リヴァイアサン』にあらわれた労働価値説 ジョーン・ロッキンの自然権 自然権の發展 民主主義思想と労働価値説は階級闘争の産物 弁証法は人類の過去の遺産を肯定的に継承する『資本論』をつらぬく弁証法的方法

2	理論は現実との格闘をうけて發展する	16
2	社会法則は認識できる 窮地におちいったとき理論は發展する	16

1	経済学と哲学の間	33
1	経済学と新カント派哲学	33
	左右田喜一郎の経済哲学 市民社会論	33

2	経済学とヘーゲル弁証法	40
	ルカチチ説の批判	40

スミスとヘーゲル スミスの労働 ヘーゲルの労働と目的論

3	『資本論』と弁証法的方法	ヘーゲル主義の批判……………	馬
		論理的なものと歴史的なもの	
		ヘーゲル主義とその批判	
		弁証法主	
		義と唯物論	

I 『資本論』の立場と方法

一	経済的運動法則の暴露 『資本論』の目的……………	ろ
	経済法則の意義 『資本論』の魅力……………	
二	史的唯物論と経済学の方法……………	大
	史的唯物論の定式 史的唯物論のあやまった理解……………	
三	研究方法と叙述方法 下向の道と上向の道……………	ヤ
	『資本論』の叙述方法 ヘーゲル主義のあやまり……………	
四	分析的方法……………	大
	マルクスの分析 古典派の意義と限界……………	
五	分析的方法から弁証法へ 貨幣の資本への転化……………	ヤ
	『資本論』体系における位置と課題 「労働力商品」の理論的意義……………	
	宇野弘藏氏の「貨幣の資本への転化」論批判……………	

六	弁証法的方法の本質……………ハ	ヘーゲル弁証法と『資本論』の方法 普遍・特殊・個別の弁証法
---	-----------------	-------------------------------

特殊Ⅱ一般から特殊へ 個別Ⅱ一般から個別のつながりへ『資本論』の体系 肯定的理解のうちに否定の理解を

Ⅱ レーニンがヘーゲル『論理学』から学んだもの ——『資本論』から『帝国主義論』へ——

はじめに——レーニンの『哲学ノート』……………100

Ⅰ ヘーゲル論理学の死せるものと生けるもの……………104

「摘要」の意義 ヘーゲルのカント批判 ヘーゲルの形式主義批判

Ⅱ 概念論の位置とその意義……………117

有と本質 概念の把握『資本論』における概念の把握

Ⅲ 理念(Ⅱ認識)は過程である……………126

個々の真理は理念の契機である 定義の制限性

Ⅳ 概念の把握の具体的内容……………134

方法と内容 主体的把握 否定の意義 普遍と特殊 概念は他者の

うちで自己を保持する

Ⅴ 「弁証法の問題について」の意義……………151

矛盾は認識法則でもある 対立物の統一と闘争 「商品の矛盾」の

例 個別と普遍 概念論の認識論的根源

Ⅵ 『哲学ノート』研究の現代的意義……………161

『資本論』とヘーゲル論理学

——梯「経済哲学」のいきつくところ——

はじめに——梯「経済哲学」の課題……………一六

一 科学と哲学の分離 科学の上に立つ哲学……………一六

二 悟性と理性 分析と展開……………一六

三 「概念的思维の自己展開」について……………一八

四 「自己矛盾」について……………一八

五 ヘーゲル『論理学』への「定位」……………二〇

六 客観的觀念論の意義……………二〇

七 主体的把握について……………二二

補論 「物神性」と「上向法」は分析的方法にかわりうるか

——近代科学の方法を否定する広松氏の場合——

一 価値の分析と物神性……………二六

二 上向法と弁証法的展開……………二六

あとがき……………二五

索引……………一

参考文献……………四

序章 経済学にとって哲学とは何か

一 経済学の創造的發展とは何か

1 『資本論』は過去にも未来にも開かれた体系である

學問としてのマルクスの理論

マルクスの理論が「論理の遊戲をこととするダイレクツタインイズム」ではなく、「現実にある問題の学問的解決」(『エヌダヤ人問題を論ず』の「訳者はしがき」、マルクス経済学レキシコンの乗 №5、大月書店、二二ページ)であることを夙に喝破されたのは久留間敏造教授であつた。それは、四〇年を過ぎた現在、いっそう重要な意味をもつてわれわれに迫ってくる。まことに、現代が提起する現実の諸問題の学問的解決、これこそあらゆる科学、なかなんぞ科学、理論に課せられた最大の課題である。

この場合の学問的解決とはいかなることだらうか。また、学問という熟語の意味するところは何かであらうか。さらに、現実と学問という熟語の組合せが意味するところは何かであらうか。

ところで、二つの漢字の文字の組合せが二つにはない新しい意味を生みだすことに注目したのは、弁証法的映画の創始者セルゲイ・エイゼンシュテインであつた。対立物の衝突を弁証法の基本だとするエイゼンシュテインは、二つの画面の衝突から二つにはない新しい概念が生まれるモンタージュ理論を打ち立てた。この理論とのかかわりで、彼は日本文化に注目したが、とりわけ彼が興味を示したのは日本

の文字の構成であった。たとえは、目と目で泪^{なみだ}、鳥と口で鳴、犬と口で吠、あるいは門と耳で聞である。聞くという字から、いかにも門に耳をすりつけて内の様子をうかがっているさまが彷彿とするではないか。問うについても同じようなことがいえるであらう。

それでは、学問という二つの文字の組合せから生まれた新しい意味は何だろう。学ぶとはまねぶ、つまり先人の教えをまねすることであり、問うとは疑問をもつことである。そして、学問とは、先人の説を継承しながらも、これをそのまま墨守するのではなく、自分の頭で主体的に考えることを意味する。諸科学はそれぞれの研究対象ととりくみ、それを分析して、そこからその対象に固有な諸法則を発見することを目的とする。けれども、諸科学は何の準備もなく、いわば素手で対象にとりくむのではない。諸科学はそれぞれの研究対象についての理論的成果、原理や法則として確立されたものをもっている。この理論的成果を現実の問題と対決させ、現実の問題の分析を自らの頭を使っておこなうこと、これが学問と科学の基本的な立場である。学問は、たんに先人の説を繰りかえすことではなく、また、先人から学ぶことなく自分勝手な思いつきをふりまわすことでもない。

『資本論』は科学と民主主義との最高の成果である

このような意味での主体的な態度で、マルクスは、人類の知識の総和をわがものとし、その土台のうえに新しい理論を形成した。マルクスは先進的なブルジョア思想と科学の継承者であり完成者であったがゆえに、彼の生涯である『資本論』は科学と民主主義の最高の成果だといえるのである。マルクスが古典派経済学から継承し、厳密に基礎づけ、首尾一貫して発展させた理論は労働価値説で

ある。すべての商品の価値はその商品の生産に支出される社会的必要労働時間によって決定されるといふ学説は、『資本論』全体の基礎理論であり、『資本論』全体をつらしてその正しさが確証され、理論自体もより内容豊かになっている。「どのようにして価値法則が貫かれるかを展開すること、これこそが科学です」とマルクスはクルスマンへの手紙（一八六八年七月一日付）に書いている。

労働価値説を理論的に形成したのはベテリ以来の古典派経済学であり、その理論はスミスをへてリカードにおいて頂点に達した。スミスは『諸国民の富』第一篇第六章で「さまざまなものを獲得するために必要な労働量のあいだの割合が、これらのものをたがいに変換するためのある規準になりうる唯一の事情」（大内・松川訳『諸国民の富』I、岩波書店、一三二ページ）だとして、次のような例をあげている。

「もし狩猟民族のあいだで、一頭のビエヴァを殺すのに、一頭の鹿を殺すのの二倍の労働が通例ついやされるとすれば、一頭のビエヴァは、当然、一頭の鹿と交換され、つまり二頭の鹿に値いすることになるであらう。通例二日分または二時間分の労働の生産物が、通例一日分または一時間分の労働の生産物の二倍に値いするのは当然である。」

リカードは『経済学及び課税の原理』の第一章「価値論」の冒頭で次のように述べている。

「一貨物の価値、即ち何でも之と交換せらるべき他の貨物の数量は、その生産に必要な相対的労働量によって定まり、その労働に対して支払はるる報償の多寡によって定まるものではない。」（小泉訳『経済学及び課税の原理』、岩波文庫、一三二ページ）

労働価値説が形成されるための思想的前提は、封建制度にたいするブルジョアジーの最初の決戦であるプロテスタント宗教改革のなかで準備された。マルティン・ルターは、農民から生まれたブルジョア

という出生にふさわしく、單純商品生産を擁護し、商業資本や高利貸し資本を敵視し、これらと闘った当時のカトリック・ローマは最大の高利貸しであつたからである。ルターはこの面に注目したマルクスは、『資本論』の商業資本や利子生み資本の箇所、しばしばルターの著書『牧師諸氏へ、高利に反対して』などに言及している。

「聞くところでは、今では年々ライプツィヒの市では一〇マルデン、すなわち一〇〇について三〇も取られている。……なんといいことだ、いったいおしまいはどうなるのだろうか？……身体にも商品にもどんな危険を受けることもなく、なんの労もとらないで、ただ妬のそばにすわつてりんごを焼いている。つまり、盗人が家にすわつていて一〇年のうちに全世界を食つてしまふようなものであろう。」一五年前に私は高利に反対して書いたが、そのときすでに高利はもはやどんな改善も望めないほどひどくはびこつていた。それ以来高利は非常に思ひ上がつて、もはや悪徳や罪業や恥辱とされることには甘んじないで、あたかも人々に大きな愛とキリスト教的奉仕とを与えるものでもあるかのうに純粹な德行であり名譽であると自賛するようになった。恥辱が名譽となり悪徳が德行となつたのでは、いったいどうすればよいのか？」ルター『牧師諸氏へ、高利に反対して』(一五四〇年)『資本論』大月書店普及版⑨、七八八―七八九ページ)

一方で、ルターは、掟にしたがつた宗教的行為が救いを保障するものでなく、どんな人間の行為であつてもそれが信仰にもとづくものであるかぎり善であるとした。どんな労働でも信仰に生かされるかぎり聖であり価値あるものとなるのである。また、ルターは俗人と異なる聖職者が特別に神の恩寵にあずかるとは考えず、どんな職業でも信仰にもとづくかぎり聖いとした。

このようなルターの労働観・職業観は後にブルジョアの労働価値論が形成されるための思想的前提となった。労働価値論が成立するためにはさまざまな労働に異質性のみをみる中世的な考えが克服され、すべての労働の同等性の概念が民衆の先入見になることが必要だからである。この意味からも、マルクスがルターを「最古のドイツ国民経済学者」とよんだことも正当だし、ルターが労働価値論の先駆者だという主張もあやまりではないだろう。

プロテスタンティズムは政治的にはきわめてラジカルであり、一つの集団あるいは階級の解放をめざしたけれども、その集団や階級を形成する個々の人間の人權を守りぬこうとする姿勢には欠けていた。民主主義思想のもうひとつの側面、人類の自由と平等をめざし人間の尊厳と人權を守りぬこうとする思想は、ルネッサンスのヒューマニズムによつて提唱された。

生きることでこそ最高の価値であるというヒューマニズムの主張は、すべての人は生存の権利をもつのだ、その権利は自然の権利であり国家といえどもその手段にすぎないのだ、という主張へと発展していった。

ルネッサンスの思想と科学を継承し、これをイギリス革命の火で打ち鍛え、近代的な人間観・社会観をうちたてた思想家——それがトマス・ホッブズであった。

そして彼の批判的継承者ジョン・ロックにおいてブルジョアの古典民主主義は確立したのである。それはまた、古典派経済学に継承されていく労働価値説の形成されていく過程でもあった。それでは、マルクスにおいて頂点に達した民主主義思想と労働価値説との生成・発展をたどってみよう。

古典派経済学の最大の成果である労働価値説は、近代科学と民主主義思想の直接の産物である。それは近代自然法思想の発展と密接な関連をもっている。中世においては、自然法は封建的な身分制を支えたのであるが、近世になって、それは権力も法律も侵すことのできぬ人間の力を越えた永遠の定めとして、封建的身分制の原理を否定する思想のよりどころになっていた。この転倒は、ほかならぬトマス・ホップスによってなすとげられたのである。

ホップスの生きた時代は、ブルジョアジエの封建勢力にたいする第二の決戦たるイギリス革命が闘われていた。革命勢力は長老派、独立派、そして平等派であった。クロムウェルのひきいる独立派の軍隊の原理は、「契約」の原理であった。平等派は、最も貧しい者も生きる権利をもっているとして、人間の自然権・生存権を高くかかげた。

ピューリタン革命を頂点とする革命の時代を生きたホップスにとって、人間が生きていることこそ最高の価値であつた。理性によつて発見された一般法則である自然法は、人が生命を破壊したり、生命維持の手段を奪ひさるようなことをするのを禁じている。すべての人は生存の権利をもち、この権利は自然の権利である。国家といえども、この手段にすぎない。

「平和を求め、それに従え」が第一の基本的な自然法であるが、それは「可能なあらゆる方法によつて、自分自身を守れ」という自然権と不可分である。基本的な自然法から引きだされる第二の自然法は、権利の放棄・譲渡である。それは平和と自己防衛という目的のためであるから、そこに権利の相互譲渡